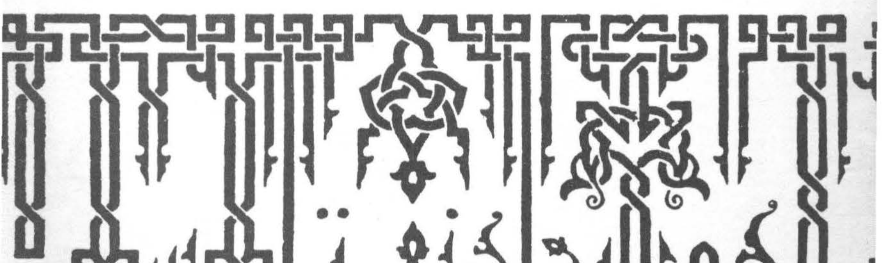
神の預言者たち

انبياء الله



ISLAMIC CENTER, JAPAN

目　次

一、序章

●「使者」そして「預言者」の意味

アラビア語で「ラスール」とは、「遣わされた者」とか「使者」という意味で、「ナビー」とは「情報をもたらす者」とか「ニュースを布告する者」という意味である。我々は前者を「使者」、後者を「預言者」と解釈している。

宗教的にいえば、二つの語は「神の啓示によって与えられたメッセージを人々に（預言者ムハンマドの場合は全人類に）伝える人」という意味である。従って、イスラームで使われている「預言者」という言葉には、予言するとか、未来の出来事を予知するといった意味は含まれていない。

●クルアーンに記された預言者達

まことに、われは、それぞれの民に使者をつかわして「アッラーに仕え、邪神を避けよ」と命じた。（クルアーン第一六章三六節）

我々は、これまで世界中に多数の預言者がいたことを知っているが、このうちのごく少数の預言者しかクルアーンには書かれていない。

なぜならクルアーンには、次のように述べられているからである。

ある使者たちについては、先にわれはなんじに告げたが、ある使者たちはまだなんじに告げていない。（クルアーン第四章一六四節）

クルアーンに出てくる預言者達は次の通りである。

アーダム　サーリフ
ハッド　ルート（ロト）
イスハーク（イサアク）　ユースフ（ヨセフ）
ムーサー（モーゼ）　アイユーブ（ヨブ）
ヌーフ（ノア）　シュアイブ
イブラーヒーム（アブラハム）　イスマーイール（イスマイル）
ヤアクーブ　ユーヌス（ジョナ）
ハールーン（アーロン）　ダーウード（ダビデ）
スライマーン（ソロモン）　イルヤース（エリイジャ）
イドリース　ヤフヤー
イーサー（イエス）　ザカリヤー
ズ＝ル＝キフル（エゼキル）
ムハンマド

クルアーンやハディース（ムハンマドの言行録）から、我々はまたムハンマドが神に使わされた最後の預言者であり、使者であることを知るのである。

●神の啓示の性格

クルアーンやハディースを読むと啓示は天使 ― 神の命令を実行する精霊 ― を通じて、神の預言者たちに伝えられていることがわかる。

それは天使が人間の姿かまたは天使の姿で預言者達の前にあらわれ、神のメッセージを直接伝えるのである。唯一の例外はムーサー（モーゼ）の場合であり、この場合、神はムーサーに直接語りかけている（クルアーン第四章一六四節参照）。この章では「啓示」という言葉は神が預言者達に伝達するこのようなやり方を意味するものとして使われている。

神の特性、審判の日の到来、死後の生命など、これら幽玄界の知識 ― 啓示によって、預言者達が我々にもたらしたもの ― には、はっきりとした真実の重みがある。一方、哲学者達の理論は、それがいかにもっともらしくみえようとも仮定に基づき、曖昧模糊としている。それは、人間の限られた理解力が捉え得る一角にすぎないからである。

同じ理由で、預言者的な知識というのは、詩人、神秘主義者、先覚者、聖人などが直感や霊感、神秘的な経験や霊的同化によって得たとされている知識とは性格も異なっているし、まったく比較

にならないものである。

●預言者達の特徴

一、神の預言者達は人間であった。多くの人々はこのことを信じ難いものと考え、この単純な事実を理解できないために道を誤っている。

導きが、かれらに下されたとき、人々の信心を妨げたのは、『アッラーはわしらと同じ一個の人間を使者としてつかわされたのか』と言ったからにほかならぬ（クルアーン第一七章九四節）

ここの部分において、人が誤りを犯しているのは、預言者達をペテン師だとみなして彼等や彼等のもたらすメッセージを信じることを拒むか、預言者達を尊敬するあまり、超人的な存在または神の化神と考えてしまうかのどちらかであった。

二、神の預言者達は、自己の信念に忠実であり、徳行の模範であった。とはいえ、他の人間と同じように彼等もまた判断の誤ちを犯し、人間的な弱さも持っていた。ただ彼等は、神の命令に従い、その教えを忠実に例証している。クルアーンではそのことについて次のように言っている。

「およそ預言者は不忠実なことはありえない」（クルアーン第三章一六一節）

もっと詳しく言えば、特殊な預言者については、

まことにイブラーヒーム（アブラハム）は一模範者であり、アッラーに服従し、純正な信仰で

あった。彼は偶像信者のたぐいではなく（クルアーン第一六章一二〇節）

ルートを**われわれ**の慈悲にひたらせた。まことに彼は正しい者であった（クルアーン第二一章七五節）

またイスマーイール、イドリース、およびズ＝ル＝キフルである。みんなよく耐え忍ぶ者であった。**われわれ**はかれらを**わが**慈悲に浴させた。まことにわれらは正しい者であった（クルアーン第二一章八五・八六節）

三、預言者の何人かは、神の許しを得て、特別な行為を行なったが、我々はこれを奇跡と呼んでいる。この奇跡は、それ自体ではメッセージの真実を証明するものではないが、時としてはメッセージが真実であることを示すために役立つことがある。

●歴史における預言者の役割

これまで様々な時代や国々に預言者が絶えず現われた。それは神がいつも人を導くこと、また現世や来世での人の運命に強い関心を持っているということのしるしである。人間の肉体的、生物学的な起源はいかにも世俗的なものであるが、クルアーンにこのことについて次のように述べられている。

われわれは土から、次いで一精滴からなんじらをつくり……（クルアーン第二二章五節）

彼がわれわれをつくった主な目的は神を崇拝させるためである（クルアーン第五一章五六節）

クルアーンの中で述べられているこれら崇拝の概念は非常に広く、それは個人や個人相互間を問わず、人間の生活のすべての面を含んでいるのである。真の崇拝とは、神を愛し、子供が親に寄せるような絶対的な信頼を神に寄せ、神の命令に従い、社会正義と慈悲の心と人間相互間の協力という神の掟を確立するために努力し、一人の人間が他の者に暴政や圧政を強いることに反対し、人々に神の導きを受け入れるように呼びかけることである。イスラームとは、このような生き方に対し、神がクルアーンを通して与えた名称である。この生き方とは単なる信仰や敬神行為だけの生活ではなく、最高の道徳と精神的価値を得るために、個人のみならず人間相互間の経済的、社会的、政治的、国際的な事柄における絶えざる努力を求めるものである。

クルアーンでは、イスラームとは神が人間のために定めた宗教＜生き方＞である、と我々に言っている（クルアーン第五章第四節参照）。これはイスラームが預言者ムハンマドが現われて始まったものではなく、最初の人間が地上に現われた時、既にあったということを意味している。

神が宇宙を創った時、彼はすべてのものに本性を与え、それに応じた指導を与えた。（クルアーン第二〇章五〇節）

自然界のものは、すべて神の指導＜それを我々は自然法といっている＞に従うようになっている。それはクルアーンにも述べられている。

天と地にあるものは、好むと好まざるとを問わず、ただかれに服従帰依し、かれに帰されるのである。

人間にも精神的資質と肉体的資質がある。人間の身体に限っていえば、それは肉体的生物学的な世界の一部分であるわけだが、同様に精神や道徳の世界でも、神が人間のために定めた自然な道〈直き道〉は存在する。しかし人間は、生活のこの面において選択の自由を認められている(クルアーン第一三章三一節参照)。そして、これこそが人間を他の生物と区別しているものなのである。従って、この選択の自由には大きな責任が伴うことになる。このため神の信頼に答えられなかった結果は、現世を超えて来世にまで影響を与えることになるため、人間への挑戦は非常に大きなものとなるのである。

人間の資質の一部として、神は人に均整のとれた肉体を与え(第九五章四節参照)、優れた知的能力(第二章三一節)と、地上のよろずのものを支配する力を授け(第二二章六五節)、人間の魂に神への信仰心を植えつけ(第七章一七二節)、また人に知識や真実や美を愛する心を授けた。神は自分の霊を人間に吹き込み、天使よりも人間をより優れたものとしたのである(第三八章七一・七二節)。

最後に神は、許される範囲内で正しい選択ができるよう、正しい生き方についての啓示をもたらし、道に背いて生ればどのようなことになるかを警告するため、神の使者を人間の中から選び出し

た。
ヌーフからムハンマドに至るまで、すべての預言者は自らの考えからではなく、神から与えられたイスラームのメッセージを説いている。
彼等は神が唯一であると宣言したり、人々に神に帰依するよう呼びかけるだけでなく、自らの生活で模範を示し、善行、社会正義、兄弟愛、人間相互間の協力といった神の定めた掟を打ち立てるために努力したのである。謙虚な者、貧しき者、迫害されている者、真実の追求者、それに正直な者が預言者に従う最初の者であった。一方、傲慢な者、権力を握る者、富める者、快楽を追う者、盲目的に信仰や習慣を受け入れる者は預言者達に反対した（第七章五九・九三節参照）。
これら多くの預言者達の中に、イブラーヒーム、ムーサー、イーサーがいる。イブラーヒームの功績は、神の唯一性を宣言したことである。イブラーヒームの時代からこのかた、人類の崇拝と献身と最も強い愛情に値するのは神のみである、ということを人間は決して忘れることはなかった。
ムーサーの後継者は、彼のもたらしたメッセージの一部は守っていたが、やがて彼等は多くの煩わしい細かな規制を付け加え、神の神聖な掟を単なる儀式へと落しめ、神の導きと後に人間が付け加えたものを混同してしまい、どれが人間の作ったもので、どれが神が創ったものかを区別することができなくなってしまった。彼等はまた神の導きが自分達だけへのものと考え始めるようになった。一方、イーサーの後継者達は、神のメッセージが人類すべてに普遍のものであることを理解し

ていたが、イーサーを神の地位に押し上げることによって、彼のメッセージの中心となるべき真実――神の唯一性と尊厳――を傷つけてしまったのである。

最後に、記録された歴史を見てもはっきりとわかるように、神は大いなる慈悲心を示して、最後の使者ムハンマドを送られたのである。そして、それ以後のすべての世のために、最後の書であり、完成された書である神の声明書すなわちクルアーンを人類へ与えられたのである。人々の中から一人の使者が選ばれ、その導きを伝え、解説し、それらを自らの生活の中で例証し、それに従って行動しながらイスラームを世界に広めんとする一つの共同体が結成された。

なんじらイスラーム教徒は、人類につかわされた最良の教団である。なんじらは正しいことを命じ邪悪なことを禁じアッラーを信奉する（クルアーン第三章一一〇節）

真理は、既にそれ以前から人類に与えられていたのであるが、それは達成不可能な理想として残されたままになっていたのである。

そしてムハンマドの出現によってそれらは確固たる現実となったのである。つまり一団の人々が兄弟愛や親切心、社会正義、道徳律、信仰といった神の定めに従い「アッラーのお言葉を最高に上げたもう（クルアーン第九章四〇節）」ように生命と財産をあげて努力したのである。かくしてイスラームはイーサー（イエス）の後、七世紀を経ムハンマドの時代をもって、人類の歴史の中で逞ましく歩み始めた。

神の人類への導きは、クルアーンの中ですべて完全に記述されている。ここに神の最後の預言者が現われ、そして去っていった。しかし、神の言葉を最高のものとしてとらえるように努力している者と自らを神と責任のない者と考え、人間の作った理論や法律、慣習にしがみついている者との闘いは今なお続いている。

預言者達の使命について、その理解を深めるためにこの章では人類の歴史に大きな影響を残した三人の預言者、イブラーヒーム、ムーサー、イーサーの生涯について述べてみたいと思う。ここでの記述はクルアーンの章節に基づき、預言者達の生涯の中で特に道徳的精神的な意味を持つ部分を強調してみることにした。読者は、これら初期の預言者達の生涯におきた多くの出来事が、預言者ムハンマドの上におきた出来事と非常に似かよっていることに気付かれることであろう。ムハンマドとその高弟達は、迫害が侵略の戦いに直面した時、それまでに他の預言者の上におこった出来事を知り、大いに慰められ力付けられたのである。

二、イブラーヒーム（アブラハム）

アッラーに真心こめて服従帰依し、善い行ないにいそしみ、イブラーヒームの純正な信仰に従う者より、教えの上ですぐれた者があろうか。アッラーはイブラーヒームを親しい友とされたのである（クルアーン第四章一二五節）

イブラーヒームの生涯の出来事は、クルアーンの各所に記述されているが、中でも次の各章に多くのことが記されている。クルアーン第二章一二四〜一三五節、第六章七四〜八三節、第一一章六九〜七六節、第一四章三五〜四一節、第一五章五一〜六〇節、第一九章四一〜五〇節、第二一章五一〜七一節、第二六章七〇〜八七節、第二九章一六〜二五節、第三七章八三〜一一一節、第五一章二四〜三七節。

●幼年期

アザールの息子イブラーヒームは、チャルディアンズ（イラク）の地、ウルの街に約四千年前に生まれた。当時、神がそれまでの預言者を通じて与えた導きは忘れられ、人々は偶像崇拝の日々を送っていた。そのような時代的背景下にイブラーヒームは生まれ育ち、神によって使者として選ばれた。

若い頃からイブラーヒームは、偶像や天体を崇拝することの誤りと無益さについて、父や家族の者や周囲の人々に説きはじめていた。イブラーヒームは彼等と議論して訴えたのだが、彼等の答えは「我々は親の代から、これらの像を崇拝しているのを見てきたのだ」というものであった。

クルアーンの第二一章五一節〜七〇節には、イブラーヒームが人々の留守中に、偶像類をその最も大きなもの一つを除いて、粉々に砕いた仔細が述べられている。人々が帰って来て彼を問い詰めた時、イブラーヒームは次のように答えた。「その偶像が口をきけるなら、偶像にきいてみるがい い……」

彼等は偶像崇拝が意味のないことであると気づき、恥じたのだが、自分の生き方に固執する人間の常として、彼等は自分の誤ちを認め、生き方を変えるよりも真実を覆いかくす方を選んだのである。

彼等の対応は「イブラーヒームを火あぶりにして、我々の神を守れ」というものであった。しかし、神はイブラーヒームを救い「その時、われは『火よ冷たくなれ、イブラーヒームの上に平安あれ』」と命じたのである。

●イスマーイール（イスマイル）

後年イブラーヒームは、神の命を受けて故郷を去り、カナン（パレスチナ）の地に行った。彼の

供は妻のサラと、預言者でもあるルートと彼の召し使い達であった。何年か後に、彼等はネゲブに移り、そこからルートはさらにソドムへと移住した。イブラーヒームは既に年老いており、子供はなかった。そこで彼の妻の提案により、彼女の召し使いの一人ハージルを自分の妻とした。彼の祈りにこたえて、神はハージルにできた息子を彼に授け、その子にイスマーイールという名を与えた。その後に神は、イブラーヒームにハージルと男の赤ん坊を連れアラビアのある地へ行き、そこに彼等を置き去りにするよう命じた。イブラーヒームはバータの谷間に彼等を同行し、後にメッカとなった場所に置き去りにした。谷は乾燥しており、一本の草木もなかった。すぐにハージルと子供は水の欠乏に直面し、イスマーイールは喉の乾きのため泣き始めていた。母親は水を求めて周囲の丘の間を走り、涙を流して神に助けを乞うた。力つきて最後に彼女が赤ん坊の所へ戻ってみると、子供が踵で掘った地面から水が湧き出ていた。この泉はザムザムの泉と呼ばれ、今日に至るまでこんこんと水が湧き出ている。この故事にちなんだサアイの儀式は、ハージルが水を求めてサファとマルワの二つの丘を往き来したことを記念して、ハッジの行事の中に取り入れられている。

●生贄の試練

やがてアラビアの多くの部族がバータの谷にやって来ては定住し、イブラーヒームの家族と供に生活をはじめた。イブラーヒームは彼等の家々を何度も訪問した。イスマーイールが青年となった

時、イブラーヒームは一人息子イスマーイール(イスハークはこの時まだ生まれていなかった)を神への生贄として捧げた夢を見た。しかも彼はこの夢を三晩続けて見たのである。イブラーヒームはこの出来事を神の命令と受けとめ、息子イスマーイールに話し意見を求めた。イスマーイールはすぐに父の意見に従い、身を捧げることにした。しかし、それは神がイブラーヒームの信仰と神への献身の意志を試したものだということがわかり、一匹の仔羊が身代りとして生贄として捧げられた。このようにして神は、それ以後、偶像崇拝者が実際に行なっていた人間の生贄をはっきりと禁じたのである。このイブラーヒームとイスマーイールの神への献身を記念して世界中のムスリム達は、仔羊、仔牛、またはラクダを殺し、その肉を友人や親類や貧しい人々と分け合い、イード＝ル＝アドハ（犠牲祭）を祝うようになったのである。

●カアバ神殿の建設

イブラーヒームはイスマーイールと共に、カアバ神殿すなわち神を崇うために建てられた最初の建造物をメッカの谷に築いた。その時イブラーヒームとイスマーイールは次のように祈ってカアバ神殿の礎えを定めた。

主よ、わたしたちから、この奉仕を受け入れて下さい。まことに**あなた**は全聴者、全知者であられます。

主よ、わたしたち両人をあなたに服従帰依する者（ムスリム）にして下さい。またわたしたちの子孫をも、**あなた**に服従帰依する衆にして下さい。わたしたちに祭儀を示し、哀れみをたれたまえ。**あなた**はたびたび許したもう方、慈悲深い方であられます。（クルアーン第二章一二七〜一二八節）

●イスハークの誕生

その後、イブラーヒームは妻サラとの間にもう一人の息子が生まれるという神よりの吉報を受け、その子をイスハークと命名した。サラはこのことに驚いて叫んだ。「私はとても年老い、夫も老いているのに、どうして子供を生むことができるのでしょうか、これはなんという不思議な出来事でしょう」

神は自ら欲するものを創りたもう。サラは老年になってからイブラーヒームの息子を生んだ。旧約聖書の創生記によれば、イブラーヒームは一七五才で死んだと記されている。その全生涯を通して、イブラーヒームは後世への正しい模範であり、彼の神への献身は何よりも優れていた。

●イブラーヒームの性格

クルアーンにはイブラーヒームの神への献身とその高潔な人格、そして信仰の純粋さを次のよう

に述べられている。
まことにイブラーヒームは模範者であり、アッラーに服従し、純正な信仰を持った。かれは偶像信者のたぐいではなく、
かれは、かれを選び、直き道に導いた主の恩恵を感謝した。
われは現世において、かれに幸福を授けた。来世においても必ず正しい人びとのうちにはいるであろう。（クルアーン第一六章一二〇〜一二二節）
まことにイブラーヒームは、しんぼう強く、心の優しい、不断に改悟して主に返る者であった。（クルアーン第一一章七五節）
かれ（イブラーヒーム）が健全な心で、かれの主に来たときを思え。（クルアーン第三八章八四節）
自らの魂をそこなわぬかぎり、たれがイブラーヒームの教えにそむこう。まさにわれは、この世においてかれを選んだ。来世においてもかれは必ず正義者のひとりである。
主がかれに向って「服従帰依せよ」と仰せられたときを思え。かれは「わたしは、よろず世の主に服従帰依し奉る」と申し上げた。（クルアーン第二章一三一節）

●イブラーヒームの教え

預言者となる前からイブラーヒームは、礼拝——偶像の他に太陽や月、星への礼拝——の目的について、常に不審を抱いていた。最初から彼は偶像を否定していた。長い冥想の後、健全な彼の精神は、人は自分達の創造主だけを敬まい、従うべきであるとの結論に達した。しかし、すべてのものを創りたもうたもの、そしてその主は誰であろうかと彼は思い悩んだ。

クルアーンの中には、神の唯一性について次のように述べられている。

イブラーヒームがその父アザールに、「あなたは偶像を神だとなさるか。まことにあなたとあなたの衆と、明らかに誤っていると考える」と、言ったときを思え。

われはこのように天と地の王国をイブラーヒームに示し、それでかれは悟りがひらけてきた。夜の暗黒がかれをおおうとき、一つの星を見た。かれは言った「これがわたしの主である」と。だが星が沈むにおよび、かれは「わたしは沈むものを好まない」と言った。

次いでかれは日がのぼるのを見て、言った「これがわたしの主である」と。だがそれが沈むにおよび、かれは「わたしの主がわたしを導かれないなら、わたしはきっと迷った衆のたぐいになるであろう」と言った。

次いでかれは太陽がのぼるを見て、言った、「これがわたしの主だ。これは偉大である」と。だがそれが沈むに及んで、かれは言った「わたしの人びとよ、わたしはあなたがたが、主に配する者と絶縁する」。

「わたしは天と地をつくりたまえる、**かれ**に端正に顔を向けて、純正に信仰し奉る。わたしは多神教徒のたぐいではない」。（クルアーン第六章七四〜七九節）

やがて神はかれを人々への使者に任じた。み使いになる前から恐れを知らず、邪教と闘っていたイブラーヒームであったが、いまや新たな熱意をもって、自分の父や周囲の人々と偶像崇拝の無意味さについて議論し、比類ない唯一無二の神に服従し、いつも神のことを心にとめ、徳の高い人間になるようすすめた。

われは先にイブラーヒームに、方正な行いを授けた、**われ**はかれをよく知っている。かれが父とかれの人びとに、こう言ったときを思え、「あなたがたが崇拝する、これらの偶像は何ものであるか」。

かれらは言った「わしらは祖先がそれらを崇拝するのを見た」

かれらは言った「おまえは真理をもたらしたのか、それとも戯れるものなのか」

かれらは言った「そうではない、あなたがたの主は、天と地の主、無から天地を創造された方であられる。そしてわたしはそれに対する証人のひとりである」。（クルアーン第二一章五一〜五六節）

また、イブラーヒームをも**われ**は救った、かれがその民にこう言ったときを思え「アッラーに仕え、**かれ**を畏れまつれ。それはあなたがたのために最もよい。もしあなたがたが理解するなら

ば」。

「あなたがたはアッラーをさしおいて偶像を拝し、虚偽をねつ造する。あなたがたが、アッラーをさしおいて拝するものたちは、あなたがたを給養する力はない。それで、アッラーから糧（かて）を請い求め、**かれ**に仕え**かれ**に感謝しまつれ。**かれ**に、あなたがたは、帰されるのである」。

あなたがたが真実を拒んでも、まことにあなたがた以前の諸世代も拒んだ。使者としては、ただ公明に伝道するのみである」。（クルアーン二九章一六〜一八節）

アッラーがイブラーヒームに、王権を授けたまえることから、主についてかれと論議した者を、なんじらは考えないか。イブラーヒームが「わたしの主は、生を授け、また死を賜う方だ」と、言ったとき、かれは「わしも、生を授け、また死を与える」と言った。イブラーヒームは言った「アッラーは、太陽を東から登らせたもう、それでおまえは、それを西から登らしめよ」と。そこでかの不信者は当惑してしまった。アッラーは不義を行う民を導きたまわぬ。（クルアーン二章二五八節）

そして、これがイブラーヒームがかれの息子達に残し、イスラーム教徒のわれわれに今日まで伝っている遺産である。

「わたしの子らよ、アッラーはおまえたちのために、この教えを選びたもうた、それでムスリ

ムとならずに、死んではならぬぞ」。（クルアーン第二章一三二節）

三、ムーサー（モーゼ）

そしてムーサーには、じきじきにアッラーは語りかけたもうた。（クルアーン第四章一六四節）ムーサーの生涯における活動は、クルアーンの多くの章節に述べられているが、次の項が主である。

第七章一〇三〜一五六節、第一〇章七五〜九二節、第一八章六〇〜八二節、第二〇章九〜九八節、第二六章一〇〜六九節、第二八章四〜三五節、第四〇章二三〜四六節、第四三章四六〜五六節。

●歴史的背景

ユースフ（イブラーヒームのひ孫であり、預言者の一人）と彼の両親、兄弟とその家族がエジプトに住みついて約四百年が経った。彼らの子孫であるイスラエル人（預言者でもあるユースフの父ヤアクーブの子孫）は人口が増えた。ヤアクーブには十二人の息子があり、イスラエル人はこの息子達の血筋により一二の部族に分けられた。

エジプト王（ファラオ＝ラムゼー二世〈B・C一三〇〇〜一二三四〉）は大変な暴君であった。王、議会、僧侶達は一般市民、特にイスラエル人に対し苛酷で、しきりに迫害を加えた。ファラオや彼の顧問は、イスラエル人の反乱を恐れ、イスラエル人を奴隷の身分として扱い、重労働に就か

せ、手に余るほどに仕事を増やしていった。そして、ついにはイスラエル人の増加を恐れたファラオは、部下に命じ、イスラエル人に生まれた男の子をナイル河に捨てたのである。

●ムーサーの幼年期

以上がムーサーが生まれた当時のエジプトの社会的状況である。神の導きにより、ムーサーは母親の手により数ケ月の間かくまわれていた。しかし、そこも危なくなると、母親はムーサーを葦の籠に入れ、ナイル河へと流した。母親は娘ミリアムに籠の後をつけさせ、何が起るか見とどけさせた。

河を少し下ったところで、ファラオの妻が偶然この籠を見つけて水から拾い上げた。中に可愛い男の子を発見した彼女は、宮殿に連れて帰り、ファラオの反対を説得し、命を助けたばかりか自分の養子とした。そこで、この子の世話をする女が必要となった。その時ムーサーの姉のミリアムが前に進み出て、こう言った。

あなたがたに、かれを育てる家人をお知らせしましょうか、かれにねんごろに付き添う者であります。こうして**われ**は、かれをその母に返し……（クルアーン第二八章一二〜一三節）

このようにして神の導きにより、ムーサーはファラオの家で育てられた。ファラオの家族の一員として成長したムーサーは、イスラエル人に対する同情心を母親から受け継いだことは想像に難く

ない。

ある日、ムーサーが街を歩いていると、エジプト人とイスラエル人が喧嘩をしているのに出くわした。イスラエル人が彼に助けを求めた。ムーサーがエジプト人を一撃すると、エジプト人は偶然にも死んでしまった。ムーサーは大いに嘆き悲しみ、声を出して神に許しを乞うた。

「主よ、まことにわたしは魂をそこないました。どうかわたしをお許し下さい」。それでアッラーはかれを許したもうた。まことに**かれ**は寛容者、慈悲者であられる。（クルアーン第二八章一六節）

翌日、この事件は街中に拡まった。復讐に燃えムーサーを殺そうとする者達は、彼を捜し歩いた。このことを知ったムーサーは、西アラビアのマディアンへと逃れた。そして、彼が羊の水飲み場で休息をとっているとき、少し離れた場所に二人の娘が羊の群の中にいるのを見て、ムーサーは荒々しい羊飼いの男達の中をかきわけ、順番を待っていた娘の羊に水を与えた。その後、彼は日陰に戻り神に祈って言った。

主よ、**あなた**がわたしにお授けになる、何でも善いものが欲しゅうございます。（クルアーン第二八章二四節）

しばらくすると、娘の一人が彼のところへ来て、父親のところへ来てくれるよう恥かしげに言った。ムーサーは彼女の後について行き、彼女の父親に自らの身の上話をした。大いに同情した父親

は、娘の提案により二つの申し出をした。それはムーサーが父親のもとで働き、もし八年以上働いてくれるなら、娘の一人と結婚してはどうかということであった。ムーサーは喜んでこの申し出を受け入れた。

●使者への呼びかけ

顧用期間を務め終えた後、ムーサーは家族と共に他の場所へと旅立った。旅の途中、彼は山の向うに火を見た。

かれは家人に言った、「おまえたちは待っておいで、わたしは火を認めた、あそこからおまえたちに消息を持って来よう、または火把（ほだ）を持ち返って、おまえたちを暖めよう」。

だがかれがそこに来たとき、谷間の右かわの、祝福された地にある、一本の木から声がして、「おおムーサーよ、まことに**われ**は、よろずの主、アッラーであるぞ」。

「さ、なんじの杖を投げよ」。するとかれはそれがヘビのように動くのを見て、踵（きびす）を返して逃げ、後も見なかった。（その時また声がして仰せられた）「ムーサーよ、近寄れ、そして恐れるな、まことになんじは、かたく守られている者である」。

「なんじの手をふところに差しこめ、なんのさわりもないのにそれは白くなろう。恐れにさいしては、腕をなんじの両わきにしめつけよ。それらは、なんじの主からの、ファラオとその首領たちに対する、二つのしるしである。まことにかれらは、反逆の民である」。（クルアーン第二八

章二九〜三三節）
神はそれからムーサーに彼の使命を伝えた。ムーサーはファラオの許に行き、天地の創造主に服従し、イスラエルの民を奴隷から解放するよう説かねばならなかった。

ムーサーは彼の弟ハールーン（アーロン、預言者の一人）を助手にするよう神に頼んだ。ハールーンは弁舌にたけていたからである。（ムーサーには子供の頃、真赤に燃える炭火で舌を火傷し、言語障害があったという伝えがある）。神はムーサーの要望をきき入れて言った。

それでなんじとその兄弟は、**わし**のしるしを携えて行け、そして**わし**を念ずることを怠ってはならぬ。

なんじら両人はファラオに行け、まことにかれは高慢非道である。

しかしかれに、ものやわらかな説き方で語れ。たぶん訓戒を受け入れ、または主を畏れるであろう。

「それでなんじら両人は行って、かれに言え、まことにわたしたちは、あなたの主の使者である。それでわたしたちと一緒に、イスラエルの子らを釈放し、かれらを苦しめてはならぬ。まことにわたしたちは、しるしを携えてあなたの主から来た者である。お導きに従う者は、平安である」。（クルアーン第二〇章四二〜四四・四七節）

このようにして、彼等はファラオの許に行った。

ファラオは「おまえたちの主はたれであるか、ムーサーよ」と言った。

かれは言った「わたしの主こそは、それぞれのつくられたものに、姿や資質その他を賦与され、さらに指導を賜う方であられる」。

「**かれ**は、大地をあなたがたの床（ふしど）とされ、あなたがたのため、その上に道を開き、また天から雨を降らせたもう。」（クルアーン第二〇章四九～五〇、五三節）

こうしてムーサーは、神の唯一性を説くメッセージをファラオに伝え、イスラエル人を解放しようとした。だがファラオは「もしお前が、私以外の者を神と考えるのなら投獄する」と言って脅した。神はそこで一連のしるしとして、様々な災害を起した。これはファラオをはじめ、人民達を苦しめたので、ついにファラオはムーサーの指揮のもとイスラエル人達のエジプト出国を認めた。

われはムーサーに黙示して「**わし**のしもべと共に夜に旅立って、イスラエルのために、海の中にかわいた道を打ち出し、追いつかれることを心配せず、また恐れてはならぬ」と命じた。

そこで、ファラオは、その軍勢をひきいて、イスラエルを追ったが、水が、かれらを完全に水中に沈めおおってしまった。

こうしてファラオはその民を迷わせ、正しく導かなかったのである。（クルアーン第二〇章七七～七九節）

●荒野の生活

荒野の生活については、クルアーンの各所、特にクルアーン第一一章五一〜八三節、第七章一三八〜一六二節、第二〇章八六〜九八節に述べられている。

神の導きによってムーサーは人々をシナイ半島の荒野に連れて行った。旅は困難をきわめた。水は乏しく、食物は足りず、いつ死んでしまうかわからない状態であった。そこに不平、不満、内部闘争、ムーサーに対する反抗があり、信仰の欠如していた時期でもあった。なかでもムーサーが山へ行き、四十日そこに閉じこもり神の十戒を受けた時、イスラエル人達はエジプトで馴じんでいた偶像崇拝に戻ってしまった。ムーサーの留守をあずかる指導者である弟ハールーンの反対を押しきり、彼らは金の装飾品をつぶし、牛の像をつくってそれを崇拝した。しかし、神の助けと導きは下るのである。それは水と食物（樹液とうずらの群）と、人々が生きるべき道徳律であった。

イスラエルの子らよ、**われ**がなんじらに与えた恩典と、**わが**啓示を万民に先んじて下したことを念え。

そして**われ**が、なんじらをファラオの徒党から救ったときを思え、かれらはなんじらを悪い刑に服させ、なんじらの男児を殺し、女児を生かしておいた。その中にはなんじらの主からのきびしい試練があった。

また**われ**は、なんじらのために海を分けて、なんじらを救い、なんじらが見ている前で、ファ

ラオの徒党をおぼれさせたときのことを思え。

また、**われ**が四十夜にわたり、ムーサーと約束を結んだときを思え、その時なんじらはかれのいない間に、子牛を拝し、不義を行なった。

それでも、その後**われ**はなんじらを許した。おそらくなんじらは感謝するであろう。

また**われ**がムーサーに、経典と正邪の識別〈フルクァーン〉を与えたことを思え、おそらくなんじらは、導かれるであろう。

われは雲の影をなんじらの上におくり、そしてマンナとウズラとを下し、「**われ**が授ける善いものを食べよ」……

またムーサーがその民のために、水を求めて祈ったときを思え。**われ**は「なんじのつえで岩を打て」と言った。するとそこから、十二の泉がわき出て……

なんじらが「ムーサーよ、わしらは、一色の食物には耐えられないから、地上に産するものを、わしらに賜わるよう、おまえの主に祈ってくれ。それは野菜・きうり・穀物・れんず豆と玉ねぎ」と、言ったときを思え。かれは言った「おまえたちは、良いものの代りにつまらぬものを求めるのか。それならおまえたちの望むものが、求められるような、どの町にでも降りて行くがよい」。

……（クルアーン第二章四七〜六一節）

このようにして、四十年以上にわたって神の導きと助けを得たムーサーは、奴隷であった多くの

人々を神を畏敬する民へと解放したのである。ムーサーと供に出エジプトを果した人間達は、最後まで優柔不断で憶病であった。それゆえ神は、彼らが以前約束していた土地に入ることを拒んだ。

またムーサーが、己れの人びとにこう言ったときを思え。「わたしの人びとよ、おまえたちに賜わったアッラーの恩恵を心に銘せよ……

「わたしの人びとよ、アッラーがおまえたちのために定められた、聖地にはいれ、きびすを返して退いてはならぬ、そうしたらおまえたちは失敗者になるであろう」。

かれらは言った、「ムーサーよ、まことにそこには、強大な民がいる、かれらが出て行かなければ、わしらは決してそこに、はいることはできない。もしかれらがそこから去ったならば、わしらはきっとはいるであろう」。

アッラーの恩恵に浴して、主を畏れるふたりが言った、「正門からはいってかれらに当たれ。一たびはいれば、まことにおまえたちが勝利者であろう。おまえたちがもし真の信者ならば、アッラーに信頼しまつれ」。

だがかれらは言った、「ムーサーよ、まことにかれらがそこにとどまる間は、決してわしらはそこに、はいることはできない。おまえとおまえの主は、行ってふたりで戦え、わしらはここにすわっているであろう」。

かれは申し上げた「主よ、まことにわたしは、わたし自身と兄弟のほかは制御できません。そ

れでわたしたちを、この反逆の衆から離して下さい」。
主は仰せられた「そのためにこの国土は、四十年の間かれに禁じられよう。かれらは地上をさまようであろう。なんじは反逆の民のために悲しんではならぬ」。（クルアーン第五章二〇～二六節）
ムーサーはいまや老い、そして彼の任務は完了した。旧約聖書の出エジプト記によれば、彼は一二〇才で死んだ。彼の死後、イスラエル人はついにパレスチナの地を踏みしめた。

●トーラの問題

三九冊あるユダヤ教の経典の中で、巻頭の五書――創生記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記――は、ユダヤ人にトーラ（律法）と呼ばれている。この五書は別名＝ペンタチュークとか＝モーゼ（ムーサー）とも呼ばれている。
しかし、ムーサーがこれらの書を書いたのではなく、またムーサーに下った啓示（クルアーン中にはタウラッーと述べてある）もユダヤ教のトーラと全く同じものではない。（同様に、クルアーンの中でのダーウードへの啓示と旧約聖書中のダーウードの詩篇も同じものではない。）
クルアーンは言っている。
災いあれ、自分の手で経典をしたため、ささやかな代償を得るために「これはアッラーから下

ったものだ」と言う者に。（クルアーン第二章七九節）

この言葉はユダヤ教の経典に関して述べられたものである。

何世紀もの間、ユダヤ教徒やキリスト教徒は、自分達の経典に加筆や改ざんすることを厳しく拒んできた。しかし、過去二百年以上にわたり、聖書学者はキリスト教とユダヤ教両派の経典の出所や信憑性について、多くの研究を行なってきた。

トーラに関する現代聖書研究家の意見によると、ペンタチュークは幾つかの作品が寄せ集められて出来た混成作品である、というのが支配的である。二百年以上に及ぶ研究により提出されたこの仮説によれば、そこには四つの文学的要素があり、それらが複雑に絡み合い、紀元前五世紀頃ペンタチュークは最終的な形となったとされている。

それでは神のムーサーへの啓示とイスラエル人との契約は何だったのであろうか。クルアーンには次のように述べられている。

われがイスラエルの子らと、約束を結んだときのことを思え（そのとき**われ**は言った）「なんじらはアッラーのほかに、何ものにも仕えてはならぬ。父母に考行し、近親、孤児、貧者には親切をつくし、人びとに善い言葉で話し、礼拝のつとめを守り、定めの喜捨をせよ」。その後、なんじらのうちの少数の者を除いては、そむき去り堕落者である。

また**われ**が、なんじらと約束を結んだことを思え、「なんじらは仲間で血を流してはならない。

またなんじらの同胞を、その家から追放してはならぬ」。そこでなんじらは、これを厳粛に承認し、自ら証言したのである。(クルアーン第二章八三〜八四節)

いま我々が知っている十戒を、右に引用したクルアーンの節と比較してみると、それはムーサーに下った啓示には違いないが、現在のように拡大されたものではない、との結論に達するであろう。

啓示と神が与えた洞察力、そしてイスラエル人に対して発揮した指導力でもって、ムーサーは神の掟を守るための共同体を作った。しかし、時が経るにつれ神の掟は忘れ去られ、変化し、無視されるようになった。神が導いてきた共同体は神の教えを忘れさろうとしていた。だが神の指導の中で存続したものは、後世の預言者達、特にイーサーやムハンマドを通じて下る教えを受け入れる土壌となった。同時に神がイスラームのために定めた、直き道へと人類が歩む舞台をつくったのである。

四、イーサー（イエス）

童子を人びとへのしるしとなし、またわれからの慈悲とするため……（クルアーン第一九章二一節）

イーサーに関する記述はクルアーンの次の章節にある。第三章三五〜五九節、第四章一五七〜一五九節、第五章一九、四九、七五、七八、一一三、一二一節、第六章八五節、第九章三〇節、第一九章一〜三五節、第二二章五〇節、第四三章五七〜六四節、第五七章二七節、第六一章六、一四節。

●歴史的背景

紀元前六三年、パレスチナはローマに征服された。当時のローマ皇帝は、国益に反しない限り、被征服者の生活に干渉せず、宗教の自由、旅行の自由を保障していた。ユダヤ人はどこの地にでも住むことができ、特にジュディアではユダヤ人の意志は尊重され、ユダヤの法律を確立するため、ユダヤ教徒の僧侶による諮問委員会が設立された。

法の熱愛と献身がユダヤ教内部の統一要素であったが、この法は〝モーゼ（ムーサー）の法律〟より相当多くのものを含むようになった。ムーサーの伝承や他のユダヤの預言者、ラビ、法学者などによる解釈や説明、儀式の細目などの全てがユダヤ法典の一部となったのである。

イーサーの時代、ユダヤ人の間に多くの宗派があった。トーラの権威や寺院の生贄の儀式に異議を唱える者はいなかったが、信仰の教義を日常生活においてどのように解釈するかについて各派の相違が生じた。サドシー派とパリゼ派が二大宗派であり、イーサーの説法はこの二つの派に向けられているものが多い。なぜなら、彼等は精神を欠いた法の戒律の実践を強調した結果、宗教生活に真摯な心と謙譲の欠けた、盲目的な形式主義を作り出していたからである。イーサーはさらに、彼らが法の詳細部に至るまで堅く守っているにもかかわらず、彼らの宗教的遵奉の多くは、偽善による行為であり、神のためというより、他人に見られ、ほめられるために行なわれていると指摘した。

●イーサーの幼年時代

イーサーの母マリアはハールーンの子孫、イスランの長女であった。マリアが生まれる前、母親は生まれてくる子を神への奉仕のために捧げた。少女の頃マリアは預言者であり、僧侶でもあった洗礼者ヤフヤーの父ザカリヤーの保護の下におかれていた。神のマリアに対する御告げとイーサー生誕の話は、非常に感動的にクルアーンの中に述べられている。

そのとき**われ**は、**わが**精霊（天使）をつかわし、かれはひとりの立派な人間の姿でかの女に現われた。

かの女は言った「わたしは仁慈者に対し、あなたからお守りを願います。もしあなたが、もしあなたが、主をお畏れならば（わたしに近寄らないで下さい）。」

かれは言った「わたしは、純潔な童子をあなたに賜わる知らせのために、主からつかわされた使者にすぎない」。

かの女は「いまだかつて、人がわたしに触れません、またわたしは不貞でもありません、どうしてわたしに童子がありましょう」と言った。

かれは言った「そうであろう。だがあなたの主は仰せられる、〃それは**わし**にとっては容易なことである。それで、童子を人びとへのしるしとなし、また**われ**からの慈悲とするためである。それはすでに神命があったことである」。

こうして、かの女は童子をはらんだので、遠隔の所に引きこもった。

分娩の苦痛のために、かの女はナツメヤシの幹におもむき、かの女は「ああ、こんなことになる前に、わたしは無きものになり、忘れられ、忘却の中に消えたかった」と言った。

そのとき（声があって）かの女を下の方から呼んだ、「非しんではならない、主はあなたの足もとに小川をつくられた」。

「またナツメヤシの幹を、あなたの方に揺り動かせ、新鮮な熟したナツメヤシの実があなたに落ちよう」。

「食べかつ飲んで、あなたの目を楽しませよ……（クルアーン第一九章一七〜二六節）

かくしてイーサーは処女の母から生まれた。これは神は、神が望むものは意のままに創りたもうという表示であり、ここには神性についての暗示は含まれていない。母親のサラが高齢の時に生まれたイスハークのことを想い浮べてみるとよい。

後にマリアは、ダーウードの子孫である大工ユースフと結婚し、イーサーの他にも子供をもうけた。イーサーは長男としてユースフから大工の技術を習い、父の死後は家族の生計の柱となったことは想像できる。イーサーは献身的な息子として、家族の世話をする労苦を母と分かち合った。

「またわたしの母に孝養を尽くさせ、またわたしを高慢な不幸の者になさいません」。（クルアーン第一九章三二節）

大工としてのイーサーは日々の労働を通して隣人達との関係を深め、彼らと喜びと悲しみを分かち合った。この事は彼の後年の多くの寓話の中にも見受けられる。

クルアーンは、イーサーがまだ幼い時期に神から霊感を受けたことを書き記している。そして彼は家庭や神殿において、自らの民族の宗教的伝統へと魅了されていくのである。

主は経典と英知と律法と福音とを、かれに教えたもうた。（クルアーン第三章四八節）

●洗礼者ヤフヤー（ヨハネ）

紀元前二〇年代、クルアーンに神の預言者と述べられ、またイーサーの従兄弟である洗礼者ヤフヤーは彼の聖職をはじめた。新約聖書を読むと、彼のメッセージが国民全部に悔い改めよ、という呼びかけであったことがわかる。彼は改悛の条件として、表面的な儀式よりも内面的清洗、つまり食物や衣服の簡素化、断食の徹底等、道徳行為の厳格化を布告した。

罪の許しを願う者は、過去からの完全な断絶を象徴する洗礼を受けなければならない。これは自分の改悛の情を表わすことである。ヤフヤーは当時のいわゆる〝信心深い〟人達の利己心や強欲、偽善と対立するものとして、慈悲や誠実、精神の正しさを要求した。彼は強い影響力を持ち、人々は彼のところに集まってきた。新約聖書には、イーサーもヤフヤーの手により洗礼を受けたとある。ヤフヤーのメッセージはユダヤの人々を非常に鼓舞したので、ローマ帝国の統治者ヘドロは、自らの地位を脅かすものとして警戒し、投獄するまでに至り、そして最後には打ち首にされた。

●預言者としてのイーサー

新約聖書の伝えるところによると、ヤフヤーの投獄後イーサーは孤独と冥想の場を求めて荒野へと旅立った。その時、神からの自己の使命についてはっきりと覚醒を与えられた。それはヤフヤーの使命の延長であった。当時三十代前半であったと思われるイーサーは、故郷へと帰り、教えを説きはじめた。

クルアーンにも新約聖書の福音書にも、イーサーは全人類というより、ユダヤ人のみのために神から遣わされた使者であることが強調されている。イーサーの使命はそれまでの預言者達のメッセージを確認し、ユダヤ人の人々に謙遜と至誠の気持に立ち戻り、ムーサーのもたらした戒律に従うよう呼びかけることであった。クルアーンに次のように述べられている。

まことに**われ**は、導きと光明のある律法を、ムーサーに下した。それでアッラーに帰依する諸預言者は、これによってユダヤ人をさばいた、……

われはかれらの足跡を踏ませて、マリアの子イーサーをつかわし、かれ以前に下した律法の中にあるものを確証するために、導きと光明のある、福音をかれに授けた。これはかれ以前に下した律法の確証であり、また主を畏れる者への導きであり訓戒である。(クルアーン第五章四四、四六節)

主は経典と英知と律法とを、かれに教えたもうた。

そしてかれを、イスラエルの子らへの使者とされた。……(クルアーン第三章四八、四九節)

神はイーサーに病人の治療や死者の蘇生などの多くの奇跡を与えたので、人々は彼が神の使者であることを知った。イーサーの教えについては、後の章で論じることとする。

イーサーの後半生や死に関しては、余り知られていない。新約聖書に記されているはりつけや復活、昇天の話は疑問を呼び、多くの現代聖書研究家でさえも、信じられないことと考えている。ク

ルアーンには次のようにある。

〔神が旧約聖書に従うものを罰したのは〕かれらが自慢したからである。「わしらはアッラーの使者、マリアの子イーサーを殺したぞ」と。だがかれらがイーサーを殺したのでもなく、はりつけにしたのでもない。ただかれらにそう見えたまでである。まことにこのことについて議論するものは、迷いの中にいる。かれらはそれについて確かな知識はなく、ただ憶測するのである。かれらは、実際かれを殺さなかった、いや、アッラーはかれを、おそばに召されたのである。アッラーは、偉力者、英明者であられる。(クルアーン第四章一五七〜一五八節)

●新約聖書福音書の問題

新約聖書の二七巻の本のうち、最初の四巻(マタイの福音書、マルコの福音書、ルカの福音書、ヨハネの福音書)は、まとめて四福音書と呼ばれている。

福音〈Gospel〉という語(アラビア語でInjil)は〈よきおとずれ〉という意味である。クルアーンにおいて〈Injil〉は、神がイーサーへ啓示を下す時にだけ使われている。この啓示が本の形で書き記されて保存されているかどうかは、神のみが知るところである。新訳聖書の中にはイーサーが何か書いたとか、弟子達に口述して何かを書きとらせたとかいうことを示唆するものはまったくない。いずれにせよ、クルアーン中の〈Injil〉と新約聖書の四つの福音書を混同してはいけな

い。これらの福音書はもっと後にパレスチナの外で（そのうち早いものはマルコの福音書で西暦七〇年頃）イーサーのものとは異なった言語で、四人の記録者マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネによって書かれたものである。バルナバの福音書や幼年期の福音書もあるが、これらはキリスト教の聖典には含まれていない。イーサーが語った正確な言葉は失われ、復元することは不可能である。我々はただ新約聖書の著者達に受け継がれたイーサーの教えを、わずかながら垣間見ることができるだけである。

イーサーの伝記として、彼の教えの記録として、我々はこの四つの福音書をどの程度信頼してよいのであろうか。

過去二世紀以上にわたる聖書学者の研究と文献調査の結果は、H・G・グッドの論文〝イーサーの生涯と教え〟の冒頭に要約されるであろう。

〝今日、我々はイーサーの生涯は決して書き得ないことがわかった。資料が足りないのである。福音書は質においても、資料としても、伝記作家の要求を満たすものではない。せいぜいそれはイーサーが人に教えを説いていた期間のある出来事を述べているにすぎず、彼の人々に与えていた祝福の物語を組み立てるには不充分であり、彼のメッセージの特徴すら反映していない〟

もしイスラームの伝承学者に、福音書に伝えられているような話が提出されれば、彼らは史実や考証不足という理由で〝信頼性に関する基準〟に照会することすらせず、躊躇なく否定してしまう

であろう。

イブン・イスハークのような伝承作家ですら、口碑伝説のタイプのものはすべて捨て、ムハンマドの伝記を書いている。四巻の福音書の内容は全部口碑伝説である。それゆえ、福音書とイスラームの文献中の福音書に相当するものを較べる時、福音書はシーラの書（預言者の伝説）よりずっと評価が落ちるであろう。そもそも福音書とクルアーンと比較したり、ハディースの最もつまらない作品と比較することですら馬鹿げたことであり、その行為は福音書やクルアーン、ハディースについて全く無知であることを示している。

●イーサーの教え

以上述べた福音書の限界をふまえた上で、イーサーの寓話や言行に含まれている基本的なメッセージを引き出してみよう。

イーサーの寓話は――これは彼の言葉通りに伝わっていないが――本物らしい響きがあり、正確で、聖書研究家のすべてがこの点では一致している。我々イスラーム教徒も、それを彼の預言的な教えとして受けとることができる。というのは、その教えはクルアーンがイーサーのメッセージに関して伝えているものと基本的に一致するからである。

〔イエスは言った〕「わたしはまた、わたしより以前に下された律法を実証し、またあなたが

たに禁じられていたことの一部を、合法のものにするため、あなたがたの主からのしるしをもたらしたのである。それでアッラーを畏れまつり、わたしに従え」。

「まことにわたしの主はアッラーであられ、またあなたがたの主であられる。それで**かれ**に仕え奉れ。これこそは、直き道である」。

イーサーは、かれらが信じないのを察知して、言った。「アッラーの道のためにわしを助ける者はたれか」。弟子たちは言った「わたしたちは、アッラーの道の援助者であります。わたしたちはアッラーを信じます。わたしたちがムスリムであることの証人となって下さい」。（クルアーン第三章五〇〜五二節）

次に、最初の三つの福音書に目を転じて（ヨハネの福音書は歴史的な事実とは余りにかけはなれている）、我々はイーサーの教えに書かれている通りに要約してみよう。

神からの他のみ使い同様、イーサーもまた彼の弟子達に唯一の神を崇拝し、いつも神を心の中で意識するように教えた。神は神学上の概念ではなく、生きた現実であるということを印象づけるため、イーサーは大小の自然現象に注意を向けさせた。例えば〃美しきユリの衣（マタイ10・29）〃〃山鳩の飼育（ルカ2・24）〃〃人間の頭髪（マタイ10・29）〃〃神は天地の主である（マタイ11・25）〃〃神の力は無限なり（マルコ10・27 12・24）〃

統治者としての神は、また審判者でもある。〃指示された日に、人はそれぞれ神から日ごろの行

いの報いを、もっとも精密な計算にしたがって受けるであろう（マタイ24・45　24・14）〃

単に神を信仰するだけでは充分ではない。神に全幅の信頼をおかねばならない。〃われわれに対する心づかいと愛情において、神は人類の父の如きものである（マタイ5・45　ルカ6・36）〃そして、我々の支えや助けもすべて彼次第である。

イーサーが〃父〃という言葉を使った時、キリスト教の福音伝導者パウロやヨハネの解釈では、〃息子〃という関連語も含んでいるが、これは間違いである。イーサーの使った〃父〃とはクルアーンでいう〃養育の主〃と同義語である。

イーサーはつつましい者、謙虚な者、改悛している者、心の純粋なる者、正義のために迫害されているものは、神の祝福を受ける者であると教えた（マタイ5・3〜11）。神の戒律を実行し、それを他の人々に教える者は正しき者である。イーサーは彼の直弟子に、悪を避けるためには力の及ぶかぎりあらゆることをするように、その他の人に善行を施すことを勧みた。

隣人を愛するだけでは充分でない。その敵をも愛し、迫害者のために祈らねばならない。このようにして、徳行の完璧を目指すのである。偽善者のように、自分の信心や寛大さを人に見せびらかしてはならない。自分の気持を純粋にして、これらの行為を神だけのために、隠れてしなければならない（マタイ6・2〜6）。

自分より以前に現われた洗礼者ヤフヤーのように、イーサーも人々に後悔し、改心する必要があ

ると強調した。神の使者としての彼の使命は、これまで伝えたメッセージの真実と生命力を強固にし、トーラの律法を形式的に守るのではなく、謙譲の精神と内的な純化にたち戻ることとの必要性を強調した。彼は心の中では少しも神を畏れず、誠実さもないのに宗教の儀式的側面だけを厳格に守ることより、真実の魂を甦えらせた徳を強調した。自分の寓話の強烈さによって、彼は人々に心の誠実さと純粋さのみが神に受け入れられることを悟らせようとした。

歴史、特に西欧の歴史へ与えたイーサーの教えの影響は、評価できないほど強いものである。ローマ人やギリシャ人の世界観は、神（または神々）は人間の道徳的な行為には関係しないという前提のもとに、完全に世俗的なものである。イーサーの教えの中では、神の愛と慈悲、人の神への責任の二つの点を強調した。このことは西欧社会にとって必要とされていた道徳的精神的基盤を与えることになった。

我々イスラーム教徒は、すべての神の預言者達の真実を信じ、イブラーヒームやムーサー、イーサーの教えに忠実に従っている人々に大変親しみを感じるのである。

イスラームについての諸出版物を御希望の方は、左記の諸団体へ御連絡下さい。なお毎週金曜日、東京と神戸、そして大阪のモスクにおいて、集会礼拝を昼の十二時半より行なっております。ふるって御参加下さい。

東京

○東京イスラーム　マスジッド　03（469）0284
東京都渋谷区大山町1の19　〒151

○日本ムスリム協会　03（370）3476
東京都渋谷区代々木1の24の4　〒151

○ムスリム学生協会（日本）　03（467）3521
東京都目黒区駒場4の5の29　留学生会館　〒153

○イスラーム文化協会　03（467）2036
東京都渋谷区富ケ谷2の13の22　〒151

○日本イスラーム教団　03（209）2988
東京都新宿区歌舞伎町16　ロイヤルクリニックビル内　〒160

○日本イスラム団体協議会（代表　斉藤積平）
東京都国立市中2の22の34　〒186

○イスラーム　ウェルフェア　コー
03（833）5991
東京都台東区東上野2の23の8
アルラーフ　アクバル　フタバビル

○在日トルコ人協会　03（496）0804
東京都渋谷区大山町1の16

○在日インドネシア人ムスリム協会
東京都品川区東五反田2の9　インドネシア大使館気付
03（441）4201内線56

○ユース・ムスリム・アソシエーション
東京都世田谷区太子堂5の29の16　ファミル太子堂302号
03（414）3217

○イスラーム建築協会　03（833）5991
東京都台東区東上野2の23の8

○パキスタン協会　045（621）1480
横浜市中区山手町101　聖ジョセフ学園内

京都

○日本イスラーム友愛協会　075（642）1346
京都市伏見区深草西浦町4の36　築山設計事務所　〒612

大阪

○日本回教寺院（ジャパン・イスラミック・モスク）
06（365）1651
大阪市北区西天満4の4の13　高橋ビル西館2F　〒530

神戸

○神戸イスラーム　モスク　078（231）6060
神戸市生田区中山手通り2の57　〒650

徳島

○徳島イスラーム教育センター
徳島ハーリド学院　〒770　0886（22）4086
徳島市西船場町1丁目13　新居ビル4F
徳島市一の宮町西丁　〒771-31　坂井　積
0886（44）0338

仙台

○イスラーム文化センター　022（67）1716
仙台市片平1の2の40　清香ビル3F

金沢

○日本イスラーム青年同盟　0762（44）7019
金沢市泉本町1の7の2　泉屋書店　〒921

北海道

○北海道ムスリム協会　011（811）2113
札幌市豊平区豊平3の1阿部ビル

○苫小牧イスラーム　ソサエティ　0144（72）5186
苫小牧市弥生2丁目3の1の711　荒井節雄